

## 2020 年コロナ禍のミラノを生きて

2020.12.31 大島悦子



上の写真はミラノ大聖堂(ドゥオーモ)。

ミラノで第二波ロックダウンの始まる前日(2020年11月5日)撮影

### 1. 未曾有のコロナ大感染

#### ●イタリア人感染者第1号

それは、2月21日金曜の昼のことでした。テレビで、北イタリアで新型コロナウイルス感染者が出たという最初の報道がありました。ロンバルディア州とヴェネト州の二つの州でイタリア人の感染者発生というニュースに驚いていると、その後、感染者数が増大し、あれよこれよという間に、ニュースはすべてコロナウイルスの話題となりました。そして、たった4日後の2月25日現在、TVニュースによると、イタリアで確認された総感染者数は325名、死者は11名に達しています。この数日で「世界がすべて変わった」ほどの劇的な異変が起きたのです。

そもそも、ロンバルディア州の感染発祥地となったのは、ローディ県コーニョ(Codogno)市です。ここに住む、38歳イタリア人男性の感染が明らかになったのです。この男性、中国とは直接は関係ないのですが、1月末に、中国から出張で戻ってきた、他の会社のマネージャと会食をしていることがわかり、それが感染原因ではないかとされています。この38歳男性、しばらく前から体調不良で救急でコーニョの病院へ入院したりしていたのですが、新型コロナとはだれも想定せず、感染がわかったのは重症で再入院し初めてウイルスチェックを行った後ということです。

この男性の奥さんは35歳で学校の先生。妊娠8ヶ月で産休中のため学校に行っていなかったことは不幸中の幸いですが、彼女も感染、彼女の両親も感染。そして、この38歳男性をケアしていた家庭医も感染、コーニョの病院関係者をはじめ、この時期入院や通院していた人たちも感染という、最悪の広がりとなったわけです。

一方、ヴェネト州の方は、パドヴァ県のヴォ(Vo)という人口3300名ほどの小さな町が舞台となりました。この78歳男性がコロナウイルスの犠牲者となり亡くなりました。年金生活者で、中国はおろか、隣町に行くこともなく、中国との関係はまったくないこの男性が感染したことで、小さな町はパニックとなりました。感染源は不明のままですが、この78歳男性をはじめ、町中の人が通っていた「バール」が二次感染の「温床」となってしまう、この小さな町に感染が広がってしまいました。

イタリアの「バール」は地域の「拠り所」で交流の場です。どんな小さな町や村にいてもかならず、町の広場には一つか二つのバールがあって、人々が気軽に行き来しています。朝はカプチーノとブリオッシュの簡単な朝食をとる人でにぎわい、日中はエスプレッソコーヒーを飲んで一息ついて、店主や店に居合わせた隣人と声を掛け合うことのできる場になっています。そしてどの町にも「年金生活者」の男性たちが事実上、ほぼ専用しているバールがあり、終日、シニア男性がくつろいだり、トランプをしたりする姿を見ることができます。「ああ、イタリアにはこういう集いの場があるので、退職後の男性も地域で行き場があっていいなあ」と思うこともありました。したがって、「バール」常連客の間に感染が広まったというニュースは、胸のつまるものです。(2月25日)

### ●感染源の二つの町を「封鎖」

直ちに、ジュセッペ・コンテ首相や厚生大臣、関係省庁、「イタリア市民保護局(Protezione Civile)」代表、医学専門家、問題の二州の州知事等による緊急会議が開かれ、これら二つの「感染発祥地」に対して、非常に厳しい措置がとられることになりました。すなわち、ロンバルディア州コドーニョを中心とする10の市町村の住人5万人と、ヴェネト州のヴォ市の地域を完全に「封印」しこの地域からの出入りを禁ずる措置が決定されました。住民は「全員自宅待機」が要請されました。学校も職場も何もかも休みで、スーパーマーケットだけが開いているという模様です。この地域への道路アクセスのチェックには軍隊が派遣されています。期間は2週間が予定されています。この期間、鉄道もこれらの市町村には停車しないことになりました。

さて、コロナ感染はこの二つの感染地からイタリアの他州にも点の形で広まってしまっています。たとえば、先週コドーニョに仕事でかけていた別の州の人が地元で感染を確認とか、感染などまったく知らず、他州あるいは海外に旅行にかけたコドーニョ出身者が体調をこわし入院したらコロナに感染されていたことがわかったとか、...

そして、州として最も感染者数の多いロンバルディア州の州都ミラノでも、医療関係者に感染者が確認されたこともあり、この週末に極めて厳しい予防処置が発表されました。ミラノでは、学校は保育園から大学まですべて休校。ドゥオーモも観光客に

はクローズ。教会のミサも基本的に中止。結婚式・葬式は狭義の親族のみで行うこと。美術館、図書館など休館。映画館、シアター、コンサートホールすべて休館。さらに、スカラ座公演も中止。スポーツ競技、文化イベントも中止。サンシーロ競技場のサッカー試合も中止です。企業に対しては、できるだけ「自宅ワーク」を進めるよう要請がされました。

おりから開催中のミラノファッション・ウィークでは、ジョルジョ・アルマーニなどのファッションショーが「無観客」で開催され、顧客には映像発信という、極めて特別な措置がとられました。ミラノ見本市会場で開催の見本市類も中止や延期。先ほどのニュースでは、ミラノ最大の催しである毎年4月開催の「ミラノ・サローネ」も6月中旬実施への延期が発表されました。

そして、ともかく、人と人との交流・接触をできるだけ避けることというのが当局からの強い要請です。バール・喫茶店は18時まで営業可となりましたが、どこも日中からガラソとしていたようです。人との付き合いを大切に、一杯のコーヒー、あるいはワイングラスを手に、集まって一緒に過ごす時間を好むイタリアの人々にとって、この「人との交流」を避けることは、とりわけ厳しい試練といえましょう。

今日、ドゥオーモ広場にでかけましたが、わずかの外国人旅行客らしい人がポツポツという程度で、イタリア人とみられる人の姿は皆無でした。地下鉄もガラガラのようです。(2月25日)

### ●「握手」や「抱擁」も自粛要請

イタリア政府の発表では3月5日現在、総感染者数が3858名に達し、死者が148名を超えました。感染の中心は北部3州ですが、中部や南部にも広がりを見せています。そのため、イタリア政府は、昨日3月4日、この事態に対応する特別措置として、国内すべての小学校から大学までを3月5日から15日まで休校にすることを発表しました。来月3日までは、サッカーなどスポーツの試合は無観客で行われることになりました。同時にイタリア政府は新型コロナウイルス感染の影響を受ける家庭、労働者、企業への支援に関する緊急措置を講じました。その中には、休校の間、共働き家庭で子供の面倒をみるベビーシッター費用、あるいは子供を見るため親

の一人が仕事を休む際の経済保障なども含まれています。

なお、イタリア政府では、この危機を一体となって乗り越えていくため、感染予防として、マスク着用やソーシャル・ディスタンスの維持に加えて、日常の行動様式についても具体的に踏み込んだポイントを指摘していて驚きました。それは「挨拶するときの握手や抱擁を避けること」を国民に求めたことです。

「抱擁」は日本では最近「ハグ」と言われることが多いようですが、イタリア語では「Abbraccio アップラッチョ」。「抱擁」というと、イタリアで暮らしたことのない方は、「ああ、親愛を込めて抱き合うことか」思われるかもしれません。ところが、イタリアの挨拶としての「抱擁」は抱き合うだけではないのです。抱き合っ、互いの頬に軽く接吻(Bacio パーチョ)をしあうところまでが「挨拶セット」になっています。言い換えれば、「接吻」なしの「抱擁」という挨拶様式は存在せず、性別、年齢に関係のない挨拶スタイルなのです。

実は、私は 30 年近くイタリアに暮らしていますが、この挨拶としての不特定多数の人との「抱擁」は苦手です。もちろん、親しい人びとの間であれば自然な習慣なのでしょう。でも親しい友人の間でも、しょっちゅう会っている人、あるいは朝会って、また午後に出会ったとしても、そのたびにこの「抱擁 + 接吻」を繰り返すのは、いくらなんでも「やりすぎ」ではないかと思えます。もちろん、私も、久しぶりに懐かしい人に再会した時など、自然な行為としてこのイタリア式挨拶「抱擁 + 接吻」をすることへとまどいはありません。いずれにしても、親しい関係であれば、百歩譲ることもできましょう。

問題なのは、たとえばイタリア人の友人と一緒にいて、その友人の知り合いと道であって紹介しあったりした場合、先方は親しさを表すつもりかもしれませんが、その会ったばかりの人とも、「抱擁 + 接吻」をする流れになることも、しばしばあることです。あるいは友人宅を訪れたり、何かの集いにいって、そこに居合わせた人全員とこの「抱擁 + 接吻」の挨拶をしあうのはいくらなんでも「やりすぎ」ではないかと思えます。一生再会することもないかもしれない人、すぐに名前も忘れてしまうような人にまで、大体なぜ、抱擁して、接吻までしなければならぬかという大きな疑問

があります。したがって、「アップラッチョ + パーチョ」の挨拶をすることは、私にはどうしてもなじめないことでした。

そのため、ここは「文化の違う外国人」である「特権？」をいかして、なんとかこの挨拶をしなくてすむよう、「対策」をたててきました。その一つは、危ないと思ったら、距離をあけるため一歩下がって、笑みをたたえて、こちらから大きく手をだして、感じよくニコリと「握手」をうながし、握手ですませる方法です。

このように「抱擁 + 接吻」の挨拶については、私も 30 年来、違和感をいだき続けてきたので、今回のイタリア政府からの「要請」は特に関心を持って受け止めました。この点について、有識者がテレビ討論で、「抱擁 + 接吻」の挨拶は「形骸化した習慣」になっていて「儀礼化」している面もあるので、今回の自粛要請で、イタリア人の行動様式がどう変化するか、興味深くみていきたい、という話をしていました。（3月5日）

#### ●イタリア全土が封鎖「ロックダウン」

それは3月7日(土曜)の夜9時位のことでした。「ロンバルディア州が『封鎖』される」というニュースが流れました。『封鎖』ときいても、それが何を意味するのかすぐにはわかりませんでした。ともかく、想像もできない大変なことが起こっていることだけは直感しました。

テレビニュースでは、ミラノ中央駅に、大勢の人があわててかけつけ、夜の間列車で故郷に、特にイタリア南部に戻ろうとする人々で一杯になっているシーンが放映されました。「封鎖」される前にともかく家へ戻りたいという人々でした。その晩は不安に思いながらも就寝し、3月8日日曜の朝になりました。すでに日曜の未明に、コンテ首相の記者会見があり、ロンバルディア州と北イタリアの14の県が3月9日(月)朝から「封鎖」され、これらの地域からは出入りが制限されることなど発表になったことがわかりました。

あれやこれやしていると、3月9日(月)の夕方に改めて首相の記者会見があり、なんと3月10日(火)から4月3日まで「イタリア全国を封鎖」となるという発表があり

ました。感染者数の集中しているロンバルディアや北イタリアだけでなく、イタリア全国で「外出制限」その他の措置をとることで、感染拡大を避けるということです。(3月9日)

### ●「私は家にいます」=「Iorestoacasa」

今、イタリア政府が国民に向けて毎日発信しているメッセージは「私は家にいます=IO RESTO A CASA」です。感染拡大を防ぐためには「国民一人一人の行動にすべてがかかっている」のでとにかく「自宅にいるように」「集まらないように」「人とは最低1メートルの距離を保つこと」という強い要請です。

「外出原則禁止」で、在住の市町村からの出入りもちろん、自宅近くに外出する際も、「自己申告書」を携行し理由を説明する必要があります。外出が認められるのは、「仕事」「食品などの買い物や薬局に行く」「健康上の理由」とされています。なお、犬の散歩は認められています。スーパーはどこも通常開店しているので食品確保についての心配はありません。

ところで、本日3月15日18時現在、イタリアの新型コロナウイルス総感染者数は24747名、亡くなった方は1809名に上っています。その中には、残念ながら多くの医療関係者が含まれています。過酷な条件の中、日夜を忘れ治療に専念している医者や看護婦、医療関係の方々に対し、イタリアではその労をねぎらい、感謝しようという動きも多々みられます。街中にも感謝を表す壁画や垂れ幕なども見られます。

そして、まさに一番緊急の課題は急激に増加した感染者の治療のための、医療設備や医療スタッフの確保です。ミラノでは、市内の「旧ミラノ見本市会議場(Fiera Milano City)」に、最大600床規模の集中治療専門の架設病院を開設する準備が猛スピードで進められています。(3月15日)

### ●「ミラノは抵抗しなくてはならない」

イタリアの新型コロナウイルス感染は、北部のロンバルディア州、ヴェネト州、そしてエミリア・ロマーナ州の三州に集中しています。中でも、ロンバルディア州の感染者

数が一番多く、特に、ベルガモ県、ブレーシャ県、クレモナ県、ローディ県などに、被害が多く発生しています。

日本の報道では、ロンバルディア州について「州都ミラノの州」という紹介があるので、日本ではミラノが大変なことになっていると思われる方が多いようです。こんな言い方をすると、ロンバルディアの他地域の方々や大勢の犠牲者の方には申し訳ないのですが、不幸中の幸いとして、現在のところ、ミラノ市自体の感染者数は他の地域に比べると非常に少数です。ミラノ市内ではいわゆる「クラスター」がまだ発生していません。ただ、もしミラノが感染(源)地となると大変なので、大規模な警戒がされています。

実際、3月21日、ミラノのジュゼッペ・サーラ市長は、ビデオインタビューでミラノ市民に強いメッセージを発信しました。「ミラノはまだやられていないが、ミラノはここで抵抗しないとならない、でないと大惨事になる」

もしも、人口140万都市ミラノで感染が拡大したら、ミラノの医療システムはパンクして、大惨事になる。感染が拡大しないよう抵抗しよう」というアピールで、一人一人が自宅待機の措置を守ってこの危機を乗り切ろうという内容です。

さて、ミラノでの日常生活ですが、全体としては平穏です。

私の住むところは徒歩圏内に多数の大中小のスーパーがあるので、この際、いきつけの人気店は行列ができていますので避けて、人気のない店ですますようにしています。ミラノでは、肉屋や八百屋など個人商店は稀で、品質はいいけれど価格も高いのでこれまでは縁はありませんでした。でも今回は時には、こんな「プティック八百屋」も利用したりと、新経験もしています。薬局、銀行、郵便局、タバコ屋、キオスク、クリーニング屋、それにゴミ収集なども通常通りです。公共交通機関(バス、トラム、地下鉄)も本数は減っていますが運行しています。

活動制限の基本は、人と人との接触を減らすことにあります。とにかく、外で人と集まること、それは二人であっても禁止となりました。したがって、1週間位前までは、友人と毎日、「散歩買い物」と称して、わざわざ遠い店まで散歩がてらに(距離は2メートル位とって)買い物にいったりしていましたが、これも自粛しました。公園もクロ

一ズとなり、公園での運動も禁止となりました。なお、運動やランニングなどは、自宅直近で、一人ですることだけは「しぶしぶ」と認められているので、私は、毎朝、近所の人通りのない路地をぐるぐると何回も回って足を鍛えています！！

医療体制の整備や医療関係者サポートのために、企業や実業家、VIP、有名タレントなどからの多大な寄付、一般市民からの小口寄付も続々と集まっています。私ができることは、ささやかな寄付と、私自身が感染者にならない、人に感染させないことかなと思っています。（3月25日）

### ●毎日午後6時の定例記者会見

このところ、毎日午後6時になると、少し緊張して、テレビの前に座る習慣がつかまりました。土日や祭日も含め、毎日この時間に、イタリア市民保護局ローマ本部からコロナに関する記者会見が生中継されるのです。同局のポレツリ長官が、その日に確認された新型コロナウイルス感染状況・医療体制データを発表し、政府医学専門家会議メンバーが医学面での解説を行い、そのあとは記者との質疑応答タイムです。記者からは一般市民が知りたがっているかなりつつこんだ質問が投げかけられ、一つ一つ丁寧な応答があります。透明性の高い姿勢は立派なものと思います。

昨日4月4日の記者会見では、感染者数の増加も、この10日以上横這いが続いており、はじめて「カーブ下降線」に入り、3月10日から施行されてきた厳しい「外出禁止」措置の効果が確認されたという発言がありました。そして、本日4月5日の会見では、3つの重要なポイントが指摘されました。一つは、ICU(集中治療室)患者数が昨日に続き、二日連続して、前日より減少したこと。もう一つは、コロナ関連の入院者総数が、初めて、前日より減ったこと。そして、コロナで亡くなった方の数も、4月3日766名、4月4日681名、4月5日525名と、連日減少がいていることです。そして、これらの点も踏まえ、改めて「感染カーブは下がり始めた」という確認がありました。

ただし「緊張感を失わず、『外出禁止』の行動指針を守ることが非常に大切」、その上でいよいよ「フェーズ2」の準備を進めなければならないという指摘がありました。亡くなった方が減少しているとはいえ、その総数は、15,887名にのぼり、その数字

の重さには、正直、眼がくらむような思いがしてきます。また総感染者数も128,948名にのぼっています。さらに、心が痛むのは、医者や看護師など医療技術者の方々、100名以上が命を落としている点です。改めてこのウイルスの想像もできない破壊力に圧倒される気持ちになります。とはいえ、昨日よりは少しでもよいトレンドに向いているというニュースは、先の見えない毎日を過ごしてきた者としては、率直に嬉しく受け止めたいと思います。

さて、上記した「フェーズ2」の準備が、現在、大切な「キーワード」となっています。つまり、「ロックダウン」から「普通の生活への再開」への「移行時期」を、いつ、どのように進めていくのかという議論です。同時に、この間に仕事を失った方へ対策、商店や企業の休業補償をどうするか、経済をどう再興させるかも大きな課題です。（4月5日）

### ●「ケーキ作り」「料理ブーム」

興味深い現象が起きています。「ケーキ作り」や「料理ブーム」です。イタリアでは日曜日のお昼は家族や親せきが集まって一緒にランチをして美味しいケーキを食べることが習慣になっています。そのため、街中の「パスティツェリア(生菓子屋)」も日曜はお昼まで開店していて、お土産にトルタ類の包みを持って実家にいそぐ人々の姿も目立ちます。現在、一緒に住んでいない家族を訪問しあうことは禁じられています。やはり日曜日にはケーキということなのでしょう。

自宅でケーキ作りという家庭が増えたようです。先週日曜には友人から「今日はマンション中にケーキの香がただよっている」とメッセージがきたかと思うと別の友人は「フェイスブックに自分でつくったトルタややお菓子を自慢している人が沢山」といつてきました。実際、このところ、日曜日のケーキ作りだけでなく、日々、パン作りや手打ち生パスタづくりなども人気のようです。「小麦粉とイースト菌と卵」が手に入りにくいというニュースも流れています。

私はパンやケーキ作りはしませんが、普段のお料理でも、以前から気になっていたレシピを試行してみたり、結構凝ったものに挑戦しています。特に、大昔から実現したかった「ほうれんそうのキッシュ」を何度もつくり、かなりのレベルに達したことは

ささやかな収穫です。こんなことが一日の中で、気持ちの落ち着くひとときとなっています。（4月6日）

### ● ジュリアちゃんの誕生

この4月7日、ミラノの専門病院で、一人の女児が誕生しました。その名は、ジュリアちゃん。ジュリアちゃんの父親は、2月21日「イタリアのコロナ感染者第1号」と確定されたマッティアさんです。ご本人は中国に行ったわけでも中国の方との直接の接触もないのですが、中国に頻繁に出張しているビジネスマンの友人との会食が、感染のきっかけでは当初推測されました。ところがこの友人からはウイルス陽性反応が検出されず、「0号」が誰なのかは謎のままです。

いずれにしても、マッティアさんの発症を機にコードーニョが主要感染地の一つとなり、ロンバルディア州に最悪な広がりが確認され、現在に至っているわけです。この男性、世界的な多国籍企業に勤務する研究員で、仕事にも地域活動にもスポーツにも何事にも極めて活発で社交的な方ようです。実際様々なスポーツをしていて、感染症状の出る直前まで、地域のハーフマラソンに参加したり、サッカー試合にも2度加わり、さらに、友人知人との外食を3回していました。ということで、勤務先企業の社員をはじめ、この男性の極めて広い交友関係に対すすべてウイルスチェックとなりました。

さて、マッティアさんの症状は当初非常に深刻でした。パヴィア大学病院に搬送され、集中治療室に約3週間収容され重篤状態の後、徐々に回復し、3月23日、実に1ヶ月以上ぶりで退院しました。ところで、マッティアさんの奥さん、ヴァレンティーナさんも、ご主人とほぼ同じ時期に感染が確認。学校教師ですが、妊娠8ヶ月で産休をとっていました。ヴァレンティーナさんの症状は軽く、自宅待機となり、お腹の赤ちゃんは陰性であることも確認されました。

そして、この4月7日、ミラノの専門病院でジュリアちゃんが誕生しました。ジュリアちゃんの陰性も確認されました。「コロナ感染第1号」と「第2号」のお二人が、コロナを乗り越え、この日を迎え新しい家族の誕生を祝うことができたのです。ただ、マッティアさんのお父さんは同時期に感染し、その後、治療の甲斐なく亡くなりました。

本日現在、イタリア全国でコロナウイルスの犠牲者数は、21,645名に上っています。第1号マッティアさんの感染がわかった2月21日の時点では、その後、こんな恐ろしい形で進展するとは誰も予想すらしなかった事態となりました。そんな中、ジュリアちゃんが元気に誕生したニュースは一つの希望を与えてくれたといえましょう。そして、「感染者第1号」夫妻の新しい命の誕生を、率直に祝うことのできるイタリアの人たちの暖かさ、心の豊かさに改めて感銘しています。（4月15日）

### ● 「ベッラ・チャオ」の合唱

今日4月25日土曜日、15時ごろのことです。外から「ベッラ・チャオ」の大きな音響が、聞こえてきました。友人がメッセージで知らせてくれていたので、「ああ、始まった！」と思って、通りに面した窓から外を見ました。通りを隔て真ん前のマンションでは、窓の下に「三色旗(イタリア国旗)」をたらしめている家もあれば、バルコニーに人が出ていて、バルコニーのない家では、窓から外をのぞいています。皆「ベッラ・チャオ」を口ずさんで少し微笑んでいます。

実は、通りを隔てた真ん前のマンションは、私の見る側は、それぞれのお宅の北側にあたるためか、通常はほとんどどこもシャッターが下りています。したがって、これまで面識もほとんどない人ばかりです。でも、今日は、シャッターをあけて、窓をあけて、手をふりあってお互いに笑顔で会釈をかわすことができました。「ベッラ・チャオ」を歌いながら。その中の一人が、窓を大きくあけて、大きなスピーカーを室内から運んできて、窓枠の上ののせて、スイッチをいれました。ガンガンと反響する「ベッラ・チャオ」にあわせてまた、歌いました。すると、上の方の階のお年寄りも顔を出しました。また手を振りあいました。

ああ、3月10日のロックダウンから1ヶ月半も続く難しい生活を、皆、それぞれが自宅で頑張ってきたのかと思うと、シャッターの向こうの生活に思いをはせて、ベッラ・チャオを歌いながら涙が出ました。

ところで、今日4月25日は「イタリア解放記念日」。ナチズムとファシズムから解放されたことを記念する日で、イタリアでとても大切な祝日です。1945年のまさにこの4月25日、ミラノとトリノなど北部主要都市がレジスタンス運動によってナチスドイツ軍

の支配から解放され、長い戦いの日々が終わったのです。イタリア全土で記念行事が毎年行われて、北イタリアのレジスタンスの中心地となったミラノでは、例年は特に盛大な祭りが祝われ、広場や大通りに「ベッラ・チャオ」の歌声が溢れる賑やかなイベントです。日本でも「さらば恋人よ」と訳されなじみの深い「ベッラ・チャオ」は、レジスタンスの象徴となった曲です。

75 年目にあたる今年の「イタリア解放記念日」は、広場や大通りから「ベッラ・チャオ」の大合唱が聞こえることはありませんでした。でも、15 時にイタリア全土で「バルコニーでのベッラ・チャオ」の輪が広がったのです。ミラノ市庁舎バルコニーで、ミラノ市長が一人で「ベッラ・チャオ」を歌う映像もニュースでみました。

イタリアにとって、第二次大戦後に匹敵する「最大の危機」となった「コロナ感染の非常事態」。この危機を乗り越えていくには、第二次大戦後と同レベルの「再生のための取り組み」が必要とされています。イタリア大統領も、75 年前のように、今こそ国民が一致団結して再生しようと呼びかけました。かつて大きな試練の時代を彩った「ベッラ・チャオ」の歌声が、戦後 75 年の今年、イタリアの人々の心をついに、「イタリア再生」の応援歌となっているともいえましょう。（4 月 25 日）

## 2. ソフトな「再スタート」

### ●段階的な緩和「フェーズ2」の第1ステップ

イタリアでは昨日 5 月 4 日から、待ちに待ったコロナ対応「フェーズ2」が始まりました。3 月 10 日から導入されていた「ロックダウン」の段階的な緩和です。「第1ステップ」では、製造業や商業（卸業や輸出入など、ただし小売業はまだ）などが再開し、400 万人以上が職場に復帰しました。一般市民の行動制限の目玉は州内在住であれば「家族・親類」への訪問が可能となったことです。これまでは、同じマンション内でも、子供、親や祖父母の家への訪問も全面禁止されていたので、これは大きな一歩かと思います。

ところで「家族・親類」の範囲については、その解釈をめぐる大議論がかわされましたが、結局、正式婚、事実婚、婚約者、同性婚などの「関係」すべてが対象となり、

親類としては6親等までが、この範疇に入ることになりました。ただし、「親しい友人間」は「対象外」と政府の省令で発表されました！！

また、散歩やジョキングも可能となり、公園も再開されました。親が小さな子供を外に散歩に連れていくこともできるようになりました。二ヶ月ぶり、町で子供の姿をみました。この間、子供たちは全員、家に籠っていたのです。私は、早速、大きな公園に、近くに住む友人と久方ぶりに行って散歩をしてきました。この間、公園もずっとクローズされていましたが、再開を前に芝などきれいに刈られていて、ミラノ市の配慮が感じられて嬉しく思いました。

散歩については、実はかなり複雑な状況にありました。「行動制限令」の内容が段階別に厳しくなった時、「散歩は自宅から200メートル以内まで許す」という国のルールが発布されたのですが、ロンバルディア州は「それもダメ」という州のルールを発布しました。携行を義務づけられている「自己宣誓書」には、国の法律、州の法律を「了解している」ところにチェックをいれる必要もありました。一住民としては、散歩については最終的にどちらが、有効なのか、よくわからない「グレイな領域」となりました。市内には「パトカー」や「白バイ」、それに空からはヘリコプターやドローン？でも監視している？という可能性もあり、散歩一つも、こちらも慎重に行動するしかありませんでした。自宅前の路地を往復する程度はしましたが、ですから、昨日から散歩目的に「自由に」外出できるようになったことは、私にとってはとても「嬉しい出来事」となりました。（5 月 5 日）

### ●レース編みの手袋

いよいよ 5 月 18 日（月曜）から、コロナ対応「フェーズ2」の「第2ステップ」に入り、「行動制限」がさらに緩和されました。この朝、近所に住む散歩仲間の友人と、「この記念すべき日！」どこに行っておくべきかと相談しました。お店が開いている！州内であればどこにでも「自己申告書」なしに自由に移動ができる！大変な「特権」を得たような嬉しさと、「でも大丈夫なのかしら」という不安や緊張感の混ざった心境でした。

乗り物に乗る気にはならず、移動はもちろん徒歩です。せっかくだから、「ドウオーモ

広場」まで行くことにしました。片道 30 分位です。ほぼ3ヶ月ぶりのドウオーモです。この2ヶ月半近く、近くのスーパーで食品や日用品を求める以外、まったく何も買い物をしていないので、記念に何か買い物をしたいと思いました。

その少し前、友人と近くを散歩していて、彼女がレース編み手袋をしているのを目にしました。かなり使いこんだような手袋だったので、「それってどこで手に入れたの？」と聞くと、「これは大昔から使っているの。この季節、結構気持ちのいいものよ」とのこと。彼女は以前はバイクに乗っていて、最近では自転車も愛用しているので、1年中、シーズンにあった様々な素材の手袋が欠かせないといっていました。

私は、その時はじめて、手袋というと、冬の手袋しか持っていないことに気づきました。今回のコロナ騒ぎが始まったのが3月初旬。ミラノの3月は完全な冬モードです。近くに買い物に出る際は、ウールのオーバーか長めのダウンを着込んで出かけていました。死んでも風邪などひけないと思って厚いマフラーを首にまいて、暖かい手袋を着用し、マスクをしていました。

結局、思い出してみると、3月初旬から4月末位まで、ほとんど同じ格好をして、そそくさと外出していたこととなります。5月に入って、さすがに冬の手袋は暑いことに気づき、手袋はやめて、素手になっていたところ、友人のレース編み手袋が目についたという次第です。

手袋が気になったのは、別の理由もあります。一つには、コロナ非常時になって、毎日何回も「手を洗う」ことになり、手荒れが気になっていたのです。もう一つには、お店に入る時には「使いきり」薄手袋着用が義務づけられているので、持参した使いきり手袋、あるいはお店に備えられている手袋を着用しますが、手にまとわりつくようで、あまりいい感じがせず、外出時には手をいたわりたいという気持ちになっていたのです。彼女の持っているような、穴が沢山開いていて涼しそうな「レース編みの手袋」がほしいなと思いました。これからの時期、外出、散歩にこんなものがあるといないと。

ふと、小学校に入るか入らないかの頃のことを思い出しました。夏のある日、よそ行

きを着て家族で外出した時、母が短めのレース編み手袋をしていたのです。手袋は冬のものと思っていたので、「なんで夏なのに手袋をするの？」と聞くと、「大人になると、特別な外出の時はこういう手袋を使うのよ」と母が言いました。「へえ、そんなものか」と思いましたが、それから「大人になって」何十年もたちましたが、夏のレース編みの手袋など、その後、まったく思い出すこともご縁もなかったのです。

「こういう手袋、どこで売っているかしら？」と友人にたずねました。すると「ドウオーモそばのガッレリアの中に専門店があったはずよ」と彼女。「そうね。今は大きなお店に入るのはいやなので小さな路面店がいいわ」と私。ともかく、ドウオーモのそばでさがしてみようということになりました。

幸い、途中のお店でたずねると、ドウオーモの裏あたりに手袋専門店のあることがわかり早速いってみました。この日が「再開店」の初日なので、ガラス戸超しに中をのぞくと、店主らしい女性が品物を整理していました。「開店しているのですか？」ときくと、「ああ、どうぞ、どうぞ、今開けたところなのです」とのこと。どうも我々が最初の客となったようです。

さすが専門店。小さな店ですがありとあらゆる手袋がありました。薄ページュ色のレース編みの手袋があったのでそれをもとめました。大昔に母が使っていたあの手袋と少し似ています。100%コットンで、いい肌触りです。手だけでなく、疲れていた私の気持ちも癒してくれる、そんな感じがしました。これからの季節、大切に使いたいと思います。(5月20日)

### ●イタリアの「共和国記念日」

6月3日(水)から、イタリアのコロナ対応「第3フェーズ」に入り、州を越えて自由な出入りが可能となりました。「自己申告書」なしに、イタリア国内どこにでも移動ができるようになったのです。もちろん、マスク着用やソーシャル・ディスタンスの維持などの諸々のルールは今後も継続されます。

その前日、6月2日(火)はイタリアの「共和国記念日」でした。イタリアは第二次世界大戦後の「1946年6月2日」に王政を廃止し共和制に移行することを国民投票で

決定し、この日が国民の休日となっています。例年「共和国記念日」には、イタリア全土で祝典が行われます。特に首都ローマでは盛大な式典パレードが行われ、空には、イタリア空軍機が飛行機雲で3色旗を描きます。今年は、時節柄、式典パレードはありませんでした。

その代わりに、今年は、恒例の飛行機雲での三色旗は、イタリア最初の感染地となったロンバルディア州コードーニョの上空を皮切りに、1週間にわたって、イタリア全国の上空で三色旗を描いた後、6月2日、ローマ上空の三色旗がクライマックスを飾りました。マッテレッタ大統領も、6月2日にはコードーニョを訪問し、コロナ犠牲者の冥福を祈り、医療関係者の尽力、国民一人一人の協力に感謝する形で、簡素ながら心のこもった「共和国記念日」の祝いとなりました。（6月3日）

### ●「やられてしまいました！」

6月3日に大幅な規制緩和が実施された直後の6月6日（土曜）のことです。その日は、自宅で諸々雑務を片付けていて、夕方になって、一度も外出していないことに気づきました。気分転換と思って、近くまで少し散歩と思って家を出ました。土曜の夕方、お店も開いているし、テラス席で「アペリティーヴォ」を楽しんでいる人もいて、「ああ少しずつ普通の生活が戻ってきてよかった！」などと、少ししみじみとほっとして、家に戻りました。マンションの外門を開けようとして背中リュックを外すと、なんと、リュックのファスナーが全開です。

「まさか！」とギョツとして、リュックの中を見ると「ありません！」「やられてしまいました！」財布を盗まれてしまっていたのでした。幸か不幸か、これまでも「この種の盗難」経験はいくつかあるので、「落ち着いて」と自分に言い聞かせました。とにかくは自室に戻って、まずは、財布に何が入っていたか、メモに書き出しました。

ミラノ市発行の身分証明書、健康保険証、滞在許可証、「バンコマット」と呼ばれる銀行デビットカード、現金70ユーロ、公共交通機関パス。現金はしょうがないので眼をつぶるしかありません。カードや証明書類は基本的にはコンピュータ化されていて手続きをすれば「再発行」可能なものばかりです。どれも表裏コピーをしてファイルしておいたものがあります。急ぐのは、銀行カードなので、すぐに銀行に電話し

て止めました。

次は、とにかく、警察署に行って「盗難届け」を出すこと。「盗難届け」がないと、上記の証明書やカードなどの再発行はしてもらえません。普通は大切に保管して持ち歩かないパスポートを取り出し、盗まれてしまったもののコピー類を掴んで、電話でタクシーを呼んで、警察署に向かいました。もう土曜の夜ですので、本署での申告となります。

コロナ非常時に入ってから、3ヶ月、タクシーも乗り物も乗っていませんでしたがやむを得ません。電話で呼んだ時、「タクシー利用時はマスクと手袋の着用が必要です」というアナウンスが流れたので、あわてて使いきり薄手袋を手にして外に出ました。警察署も、待合室では「ソーシャル・ディスタンス」を十分にとった待機となりました。かなり待ちましたが、若い警官が、結構テキパキと「盗難届け書」を作成してくれました。通常は「スリ」にあった旅行者で溢れている場所ですが、この時期ですので「旅行者」は皆無です。私の前の人、私の後で順番を待っている人たちも、いずれも、普通の「住民」という格好でした。ロックダウンが終わり、それまで「行動自粛」していた泥棒さんたちも、行動を「再開」したのでしょうか。

翌日日曜には、市役所や州保健局などをネットで検索し「再発行手続き」についてスタディし、市役所のアポをメールで申請したり、健康保険証データをネットでおくったりと「後始末」もかなり進みました。翌日銀行に行くと、もう「新バンコマット」と「新しい暗証番号」を入手できました。家に戻ると、メールで「暫定健康保険証」PDFが届いていたのには驚きました。本物も送付手続きをしたということです。前回、この種の「盗難」にあったのは10年位前ですので、この間に、あらゆるデータがデジタル化されて「回復手続き」もスムーズに進むことを実感しました。

とはいえ、盗難の手口はあまり変わっていません。また、私も「しみじみとして」注意が散漫になっていたことも否定できません。今回の試練も、身を引き締めるようにというシグナルかもしれません。友人にこの話をしたら、お店の前でソーシャル・ディスタンスをとって行列を待っている間に「スリ」にあう人も増えていると行っていました。「コロナ非常時」から「普通の生活」に戻りつつある今、いいことも、悪いことも戻って

きているといえましょう。警戒すべき「敵」はコロナだけではないのです！！  
(6月15日)

### ●6月最後の日曜日

6月28日の日曜日午前中のことです。トラム14番に乗って、終点の「マッジョーレ墓地」に向かいました。14番はドウオーモを通る長い基幹路線なので頻りに利用しますが、その終点のこの墓地まで行くのは今回が初めてです。「マッジョーレ墓地」は、総面積は678.624平米にのぼる、1895年に開設されたミラノ最大規模の市立墓地です。

この墓地内礼拝堂で、11時から、友人のお母さまの特別ミサが行われました。友人のお母さまは、4月下旬、ミラノ市内の高齢者施設でコロナ・ウイルスに感染して他界しました。87歳でした。当時は、「ロックダウン」中でお葬式もできない時期でしたので、2ヶ月たった今日、友人は親類や親しい友人などを招いてこのミサを準備したのでした。

「ソーシャル・ディスタンス」の観点からどんなことになるのかと礼拝堂に入ると、教会によくある長いベンチ型の座席には「座っていい席」に表示シールが貼ってありました。司祭が故人のプロフィールを紹介してくれましたが、友人からも時折聞いている内容と合わせ、この機会にお母さまの人生を振り返ってみました。

お母さまは、プーリア州出身で20歳の時にミラノへ。その後、同じくプーリア出身で8歳上のご主人と結婚。二人の女の子に恵まれました。その長女が私の友人です。お母さまにとって大きな試練は、明朗活発だった次女が23歳の時、勤務先の旅行会社の仕事で南米出張の際、飛行機が墜落して同乗していた同僚の婚約者と共に死亡したこと。

そして、長女である私の友人は、35歳の時、シングルマザーとして子供を産むかどうか迷った際、「母が『一緒に育てましょう』と背中をおしてくれたから前に進めた」と、以前私に語ってくれました。実際、同じマンション別棟に住むお母さまが家事・育児を一手に引き受け、地方公務員として働く彼女を支えてくれました。その時生まれた

長男もすくすく育ち、もう大学4年生です。その後、お父様が体調を崩し、お母さまが長期にわたって自宅で介護をされたとのこと。

気丈で、一族の「大黒柱」的存在だったお母さまも4-5年前から弱られ、次第にアルツハイマー症候がでてきたこと。当初は「バダンテ」と呼ばれる外国人の介護ヘルパーを住み込みで雇ってお母さまの面倒をみてもらっていたものの、とても家でみるのは難しくなったこと。

紆余曲折の末、2年前にミラノ市内の高齢者病院付属の高齢者施設に入居。幸い新しい環境になじみ、入居者やスタッフともいい関係をつくり、穏やかな毎日を暮らしていたこと、、、仕事帰り、毎日のように施設に立ち寄って様子を見まもっていた友人も、「母親に笑顔が戻ってきた。これでやっと落ち着いた生活をおくってもらえる」とほっとした様子でした。

そこにきて、今回のコロナ・ウイルス。「ロックダウン」中は、他の高齢者施設同様、面会もかなわない状況が続きました。ミラノをはじめ、イタリア各地で高齢者介護施設入居者の集団感染がニュースとなりはじめました。家族側の強い要請を受けて、施設では、スタッフがタブレット端末を使用し、毎週テレビ電話での家族面会をはじめてくれたので「2ヶ月ぶりで母親の顔が見れた。私のことも分かってくれた」と安堵していた矢先、まったくあつという間に、友人のお母さまもコロナ犠牲者の一人になってしまったのです。23歳で夭折した妹さんの55歳のお誕生日も近いので、この日にお母さまと、お父様、そして妹さんの記念ミサを実施することにしました。ミサの後、お墓にお参りをしました。

その晩のことです。午後8時から、マッタレッラ大統領の参列のもとベルガモ市営記念墓地で行われた、コロナの犠牲者を悼む記念行事が、で実況中継されました。ベルガモ出身のドニゼッティ作レクエムが演奏されました。今回のコロナ被害、ロンバルディア州の中でもベルガモ県は最悪の被害を記録しました。犠牲者の方々、それぞれに大切なパーソナルヒストリーがあったと思うとその重みに、言葉もありません。いろんなことを考えさせられた、6月最後の日曜日となりました。(6月28日)

### 3. 「ウイズコロナ」の生活

#### ●今年の夏休み

イタリアのコロナ新感染者数もほぼ着実な下降カーブをたどり、コロナ非常時の行動制限措置もかなり緩和されています。コロナ感染に注意しつつ、できるだけ普通の生活をおくる「ウイズコロナ」の生活スタイルが始まっているといえましょう。

今日のお昼、TV ニュースを見ていたら、ヴェネツィアを初めとする観光名所の一流有名ホテル支配人が、「外国からの観光客が事実上皆無なので、非常に難しい状況」「再オープンしたけれど、80ある部屋で予約は10部屋だけ」などと厳しい表情で語っていました。

観光大国イタリア。GDP のおよそ 13-14%を広義の観光業に頼っている国であるだけに、今回のコロナ感染対応のロックダウン・入国制限などの影響はとても深刻です。現在、EU 域内では、国を超えた行き来がほぼ自由となっていますが、イタリアに来て、有名ホテルやハイクラスのレストラン、ブランド・ショップ等で沢山お金を使ってくれる中国やロシアそして米国等からの富裕層旅行者をこの夏は期待することができません。

同時に、イタリア人にとっても EU 域内をのぞくと自由に旅行できる地域はごくごく限られています。そんなわけで、今夏は、イタリア人にイタリア国内で夏休みをおくってもらおうというキャンペーンがはじまり、イタリア政府は、「BONUS VACANZE」という補助金制度を発表しています。イタリア国内で夏休みを過ごす場合、その宿泊費等の一部を補助することで、少しでも国内観光業の回復を助けようという趣旨です。

ところで、少し前に発表された「夏バカンスの過ごし方」に関する調査では、年に比べると、バカンスに行く人の数は、23%減少、そして、5人に4人は、イタリア国内で過ごす、とう結果が発表されています。バカンスの場所として人気があるのは、南イタリアのプーリアとシチリア、それにサルデーニャが続きます。やはり、イタリア人にとって、「夏バカンス＝海」なのでしょう。海水浴場については、パラソルとパラソル間の距離など、政府からソーシャル・ディスタンスに関する厳格な規制が課せられていますが、それでもやはり、海が一番ということでしょう。

でも、今年の特徴は、オーストリアとの国境に近いトレンティーノなど山の人気も急上昇していることです。この夏は、山でのんびり「リラックス」ということでしょうか。

今回の調査結果のもう一つの特徴は、バカンスの日程が「7日間」と例年より短くなっていることです。調査担当者は、コロナ感染に対する不安でバカンスを控えたり目的地を変更する人がいること、厳しい経済状況の中で、バカンス自体をあきらめる人、またバカンスの日数を抑える人が増えていることを、調査結果は反映していると語っています。ともかく、今年は、多くのイタリア人にとって例年とはかなり異なる「夏休み」となることは間違いないようです。

例年と変わるのはいタリア人だけではありません。私も、これまで毎夏日本に帰国していましたが、この夏は戻ることは難しくなりました。（7月1日）

#### ●4ヶ月ぶりの髪カット！

7月初め、とうとう、美容院にカットに行ってきた。4ヶ月半ぶりのことです。3月10日に始まった「ロックダウン」で美容院・理髪店もクローズとなりました。「フェーズ2」が始まって、5月18日からは美容院・理髪店の開業も可能となりましたが美容院は心理的にまだハードルの高い場所でした。しばらくすると、友人の中でも「美容院に行ってきた」という体験をまるで「冒険話」のように話してくれる人がでてきました。私も、髪がのびて、特に、ミラノはこの6月はえらく暑い日が多くて、のびた髪が不快になってきました。もう『限度』なので、そろそろカットしてもらわなければという気持ちになりました。

予約が必須で、店内に入る際は体温チェック。美容院側も、私もマスク着用です。美容師のアントニオをはじめ、顔なじみの女性スタッフ3-4人の姿があっ—安心しました。習慣で、衣服の上に羽織る「白衣」の置いてある棚に向かおうとすると「使いきり白衣」をくれました。私のハンドバックは大きな袋にいれられてしまいました。感染を防ぐため雑誌類も何も置いてありません。厳密な予約制なので、順番を待つ人もいませんが。カットの際は、「IO RESTO QUI(私の席はここ)」と大きく表示された台に座られました。

美容師のアントニオは寡黙な人で自分からしゃべるタイプではありません。元々、この店は二人の共同経営者の店、私は長年、年配のセルジオの客でした。セルジオがリタイヤーした後、もう一人のアントニオに引き継がれた形なので、アントニオとの関係はそれほど長くありません。そのため、これまでお店にきてカットをしてもらっても、ほとんど会話らしい会話をしない場合もある位でした。

今回、アントニオが私の髪をカットしはじめた時、「どうだったの？ いつ再開したの？」と聞きました。「3月10日にロックダウンする3日くらい前に、自発的に店は閉めたんだ。閉めている間は、まったく先が見えなかった。そして解禁になったので、2日間かけて準備をして、5月20日から再開した。」  
「そう、大変だったのね。でも、この店とても広いから、ソーシャル・ディスタンスを十分にとれて幸いだったわね」というと「そうなんだ。シャンプー台が2台、そしてカットで3台使えるから。でなかったらとてもやってゆけない。構造的に十分なスペースがとれなくて再開できない店も結構あるから」と。

アントニオに聞きました。「覚えている？ 私が最後にここにきた日のこと。2月21日、コードーニョでコロナ感染1号が発見された日の午後だったのよ」というと、「覚えている、覚えている、あの日だったね」とアントニオ。「あの日のお昼のニュースでコロナ感染1号のことは知ったけれど、まだその意味もその影響も何もわかってなかった頃よ」「そうだね。あれからすべてが変わってしまったんだ」

そうなのです。あの後、「美容院どころではない」そんな時期が続いたのです。あの日のこと、そしてその後のロックダウン中の難しい日々を思い出し、アントニオやスタッフの人々のその間の不安を思うと何ともいえない気持ちになりました。

「夏はいつから閉めるの？」と聞くと「この夏は8月中旬に1週間閉めるだけ。少しでもお客さんにきてもらわないと」とアントニオ。例年8月は3週間閉めています、今はとにかくロックダウン中の挽回をするのが急務なのでしょう。カットの後には、用紙に氏名や連絡先などを記入し署名しました。「また来るわね」といってお店を出ました。アントニオのお店も、楽ではないようですが、とにかく再開できてよかったと思いました。（7月15日）

## ●「ウイズコロナ」の生活シーン

私も最近、必要な折には公共交通機関も利用しています。もちろん乗車にはマスク着用。そして ترامも、バスも、メトロでも「着席不可」の表示のある席を避けて座らなければなりません。また「立ち位置」も図示されています。とにかく、ソーシャル・ディスタンスを維持することが必須です。

乗り物といえば、「密」を避けるため、このところ、自転車が大ブームで、注文しても在庫不足でかなり待たなければならないという声もきかれます。同時に、イ「電動キックボード（電動キックスケーター）」も、至るところで目につくようになりました。子供や若者だけでなく利用層も広がっているようです。このキックボード、スマホ・アプリを使ったシェアシステムも普及していて、次の利用者を待って路上に「駐車」されているボードも珍しくなくなりました。自転車や電動キックボード類利用を促進するため、購入代金に対し最大500ユーロの補助金が支給されるインセンティブ制度が発足することもあり、今後もブームに拍車がかかりそうです。

イタリアではもともと、カフェでもレストランでも春から夏にかけては外の「テラス席」が人気でした。この時期、お席は「中」ですか「外」ですかと、お店側に聞かれると、イタリア人なら99%が「外」の席と答えるといえましょう。

ただ、これまでは路上や広場などに「テラス席」を設けるためには市役所への申請や公共スペース利用税を支払う必要があり、「テラス席」設置には条件や制約も多く、時間とコストのかかる作業でした。ところが、今回のコロナ騒ぎで、「密」を避け、より安心して飲食店を利用できるようにと、申請なしで、各店が店の前に自由に「テラス席」を設置できる措置がとられています。そのため、お店の前に道路や広場があるところでは、競って「テラス席」が設営されています。店前にありあわせのテーブルを並べる程度のお店もあれば、きちんとしたテラスを設営したところもあります。どのテラス席もお客で賑わっています。（7月15日）

## ●ライバル二都市の取り組み

7月の始めのこと。ロンバルディア州のプレーシャとベルガモが、2023年の文化首都「カピターレ・デッラ・クルトゥーラ」に決定したというニュースが報道されました。

「カピターレ・デッラ・クルトゥーラ」は、イタリアで毎年一つの都市を選出し、その街の文化・観光を奨励・振興していく企画です。通常であれば2023年の都市選定はまだ先ですが、今回、前倒しでこの二都市が選ばれたのには大きな理由があります。

今回のイタリアにおける新型コロナ感染で、感染拡大の中心地となり、多数の犠牲者を出したロンバルディア州のベルガモとブレージャ。この地域のコロナ渦の困難な状況、逼迫する医療事情は、世界中のメディアでも紹介されました。コロナ被害で大きく苦しんだこの二都市が、全面的に協力して、イタリア全体の復興のシンボルとすべく「2023年の文化首都」に立候補し、7月3日、国会で承認されたのです。ところで、ベルガモ市長がお隣のブレージャ市長に提案し、意気投合してスタートしたこのプロジェクト、つまり、ベルガモとブレージャの二都市の「全面的協力」は、結構、画期的、というか「歴史的」なことなのです。

イタリアの各都市は「カンパニリズム」(郷土愛、お国自慢)が強いことはよく知られています。特に、近隣都市との関係は、どの都市も、長い歴史の中で戦争をしたり対立があったりといろんな事情も抱えており「ライバル意識」や「負けたくない」という意識が根強く、通常は「交流」や「協力」など難しいことが多いのです。さらに、ベルガモとブレージャの間は、サッカーの「セリア A」でも、ベルガモを拠点とする「アタランタ」と隣り合うブレージャのチーム「ブレシア」とは誰もが知っている大変なライバル関係なのです。

したがって、この二つのライバル都市が手を組んで「復興のシンボル」として一緒に「2023年カピターレ・デッラ・クルトゥーラ」に取り組むことは前代未聞で、イタリアで大きな話題となり期待が集まっているといえましょう。どちらも、予想もできなかったコロナ被害に見まわられて苦しみを共有したことで互いの距離が近づいて、新しい協力・連帯関係が生まれたこととなります。(7月25日)

### ●「小指の思い出」

それは、8月中旬、日本のお盆にあたる「フェラッゴスト(8月15日)」の少し前のことです。自宅で、まったくの不注意で、家具に片足を強くぶつけてしまいました。素足にツツカケだったので「あ！痛い」とその時は思ったのですが、その後はすっかり忘

れてしまいました。

その日は、久しぶりに友人が夕食に来るので、その準備をすることに気持ちが傾いていたためかもしれません。友人が来て、楽しく夕食をし、夜遅く、友人が帰った後、急に足の痛みに気づきました。よく見ると、右足小指全体が濃い紫色になっていました。「あらあら、あの時、小指をぶつけたんだわ」と思いましたが、内出血なので大人しくしていればそのうち治るはず、とタカをくくりました。翌日も様子をみましたが、小指は濃い紫色のままです。その翌日、小指の濃い紫色が消えないばかりか、足の甲まで腫れてきました。

「ほっとくわけにはいかない」と思い、フェラッゴスト翌日の日曜日でしたが決心して、整形外科専門病院の「救急窓口」に行きました。ラッキーだったのは、祝祭日なので、人がほとんどいなくて、すぐに、医者が診てくれたことです。

レントゲン結果を見ながら、「小指の骨が軽く骨折しています」と医者は言いました。足の小指を隣の指と一緒にくっつけて支えをした上で、親指など三本指をのぞき甲全体をテープでぐるぐるパッキングしてくれました。「どうしたらよいのでしょうか？」と私がきくと「足底の固い靴を履いてください。『ゾッコロ zoccolo』のような靴です」と医者はいいました。『ゾッコロ zoccolo =木靴』と聞いて、「え？」と耳を疑いました。

ベルガモを舞台にしたエルマンノ・オルミ監督の「『木靴の樹』= L'albero degli zoccoli」の映画シーンがよみがえってしまったのです。1978年カンヌ映画祭のグランプリを受賞した名作で、ベルガモ山村の貧しい農民親子の話です。息子が何キロも離れた小学校に通うため、父親が、地主所有地の「木」を一本切ってそれで「木靴」をつくったことがばれて、その地からも追い出されるという非情な話です。ロックダウンさなかの4月、ベルガモ県下が深刻なコロナ感染地となり、犠牲者が増大していた頃、テレビでこの映画「木靴の樹」が放映され、特別の思いで鑑賞したのでした。

一瞬ですが、私もあんな「木靴を？」ととまどいました。「あの、『ゾッコロ』といわれても。。。。」と私がいうと、「足底の固いサンダル、前が広く開いているものがあればそ

れでいいですよ。」といってくれました。

「今日履いてきたような靴はダメですか」といって、ウォーキングシューズをみせると「これは駄目です。足底が伸縮性がある靴はダメですよ」「あの、家では靴をはかないでいればいいですか?」「裸足とかは駄目ですよ。小指が動いてしまいます。家でも必ず、足底の固い靴を履いてください」

医者はさらに、「適当なサンダルがなければ、整形医療用の靴を使ってください」といって、「この型です」と見本の写真も見せてくれました。確かに、底がまっすぐですがこれはいくら何でも大きな気もしました。最近、足の負担の少ない「クッション性」の優れた靴やサンダルを好んで履いていますが、今回はこの種の靴はまったくダメで、要は「木底」のようなサンダルでなければいけないことがわかりました。

そして医者は話をつづけました。「今、処置した足の『パッキング』は2週間したらはがしていいです」「3週間は、今、説明した靴を必ず履いてください」「3週間は、極力、静養して、不要不急の外出は避けてください」

病院から戻りながら、ああ、また3週間「ステイ・ホーム」かと思いました。自分の不注意で、またまた、3週間の「ロックダウン」をしなければならないことになったとは、何とも情けない限りです。ところで、友人たちに知らせると、「私もぶつけた」とか「知り合いが同じような目にあつた」とか、結構似たような経験をした人のいることを知りました。ケガや骨折に限らず、自宅で過ごすことの多くなったこのご時世、家庭内のちょっとした事故が増えているとききました。医者の指示通り、木底サンダルを入手し、3週間「ステイ・ホーム」したおかげで、私の右足小指は完治し、日課のウォーキングも再開できました。(9月5日)

### ●ドゥオーモ広場でのスカラ座コンサート

9月13日、ドゥオーモ広場に大きな架設舞台を構築し、広場全体を観客席として、スカラ座オーケストラのコンサートが実施されました。コロナ禍でスカラ座交響楽団の活動も大きな制約を受けていた中、フルオーケストラの形で、ミラノ市民の前に登場する最初の屋外公演となりました。

スカラ座のコンサートは、実は毎年6月に「ミラノに捧げるコンサート」という形で実施されてきました。しかし、第8回目になる今年は、コロナ禍で6月の公演は延期となり、今回「イタリアに捧げるコンサート」として実施されました。例年であれば広場全体に3万人もの観客が集まることもありましたが、今回は、座席数を2600席に限定し、事前のネット予約者(無料)のみが入場できる仕組みとなりました。

この日の正午ごろ、ドゥオーモ広場を通ると、架設会場もできあがり、真っ赤な座席も広場半分ほどまですでにセッティングされていました。ドゥオーモ広場脇のポルティコ(アーケード)では、毎月第二日曜恒例の「古本市」も開かれていて、本好き市民が思い思いに古本屋の店先をのぞいていました。ミラノに普通の生活に戻りつつあることを感じる風景でした。

さて、この晩、私は「RAI」の生中継で同コンサートを鑑賞しました。コンサート第1部は、世界的バイオリニスト、シベリア出身のロシア人、マキシム・ヴェンゲーロフによるメンデルスゾーンのパイオリン協奏曲で幕開けし、その類稀な音色と演奏ぶりには大きな拍手が舞い上がっていました。第2部は、ベッリーニやヴェルディ、プッチーニなど明るいイタリアオペラの名曲の数々が続き、ロッシーニの「ウイリアムテル」で締めくくりとなりました。なお、この「ウイリアムテル」は、1943年夏の爆撃でスカラ座がほぼ全壊したあと、1946年5月のスカラ座再建を祝う歴史的な記念コンサートでトスカニーニが演奏したということで、スカラ座およびミラノにとっては特別な意味を持つ演目であることを知りました。

ところで、このドゥオーモ広場コンサートに先立ち、スカラ座オーケストラは、9月4日にはミラノのドゥオーモ内部でヴェルディのレクイエムを演奏し追悼コンサートを行っています。また9月12日(土)にはスカラ座で、コロナ禍クローズ後、最初のオーケストラ公演として、「ベートヴェン第九」が、医療関係者を招いて客席670席に限定し、演奏されました。今秋のスカラ座は座席数は限定するものの、ズービン・メータ指揮によるコンサート方式でのオペラ公演「トラビアータ(椿姫)」をはじめ、各種バレエ公演やオーケストラ演奏など様々なプログラムを用意しています。

ミラノに、スカラ座とドゥオーモがあってよかったなと思いました。コンサートにあたりミラノ市長が、「スカラ座は常にミラノのシンボル」といっていました。実際、困難な時期、再出発にむけてミラネーゼの気持ちの一つにするパワーを持っています。そして今回はそれをミラノだけでなく、「イタリア全体に捧げる」ことができたような気持ちがありました。（9月13日）

#### ●イタリアへの「賛辞」？！

ヨーロッパ各国でコロナ感染が再燃し、非常に厳しい状況になっています。特に、フランスとスペインは、昨日のデータを見ると、新規感染者数はそれぞれ 16096 名、10653 名を記録しています。英国も 6633 名と急拡大のようです。オランダ 2544 名、ドイツ 2140 名。。。

そんな中、イタリアは、昨日の新規感染者数は 1786 名で、ヨーロッパ他国と比べると比較的安定しています。もちろん予断は許されません。8 月中旬までは一日 300 人程度だったのが、その後はバカンス客の戻りなどもあり増大傾向にあり、9 月中旬から学校再開していますので、学校がクラスターにならないよう警戒も続いています。そんなわけで、まだまだ心配のつきないコロナ状況なのですが、今日、興味深いニュースがイタリアのメディアをにぎわせました。

WHO(世界保健機関)のツイッターで、「イタリアは先進国の中で最初の『コロナ大感染国』となり、準備も不十分だったこともあり、爆発的感染となり多大な犠牲者を出した。しかし、国家から地方自治体、市民一人一人のレベルで、この脅威に果敢に立ち向かい、科学的根拠に基づいた適切な施策により、このコロナ危機を乗り越えることができた」とイタリアのコロナ対応への賛辞がおくられたのです。

実は数日前にも、英国のファイナンシャルタイムズが、「イタリアは深刻なコロナ感染経験で学んだ『厳しい授業』のおかげで、感染第二波を抑制することを成功させている」と述べ、それはコンテ政権による新型コロナ政策と、国民一人一人の責任ある行動の成果であると、指摘しています。

少し褒め過ぎかなあとも思いますがかなり事実に近いとも思えます。（9月25日）

#### 4. コロナ第二波の到来

##### ●「アジェンダ」最下段 のメモ

今日は朝から雨、最高気温も 15 度前後で、肌寒い一日となりました。肌寒く感じたのは、雨や気温のせいだけではありません。イタリアのコロナ感染が、大変なことになっているのです。ヨーロッパのコロナ感染については、少し前から、厳しい状況になっていましたが、それに比べるとイタリアは比較的、感染者数が少ない国とされてきました。でも、ここにきて、急速に感染者数が増大しているのです。

ところで、イタリアがこの春、コロナ大感染が爆発！したころ、私は、予定表と日記帳兼用の「アジェンダ」最下段にその日の新規感染者数を鉛筆でメモする習慣ができました。毎日午後6時に、ニュースで実況される当局の定期会見を恐々と見て、そこで発表される新規感染者数をアジェンダにメモしていたのです。コロナ感染が落ち着くと、定期会見もなくなり、このメモも途絶えていました。

ところが、10月に入り、事態は急変します。10月1日には、2548名。そして10月7日は、3678名。10月9日 5372名。5000名台の大台を超えてしまいました。10月13日 5901名、10月14日 7332名。そして今日10月15日は、8804名と大変な数字を記録しました。なお、検査数自体も、162,932件とこれまでの最高数に上っています。

こうした事態に対応するため、10月13日に新型コロナウイルスの第二波感染拡大防止のためのイタリア政府の措置に関する新しい首相令が発布され、昨日から適用されています。目下は、全国的なロックダウン的は想定されておらず、マスク着用義務の強化や個人の行動制限規制などが主となっています。とはいえ、地域的にごくごく限定された区域での「ミニ封鎖」はすでに何ヶ所か実施されています。（10月15日）

##### ●ミラノは「レッド・ゾーン」に

ロンバルディア州に「審判」が下ってしまいました！！イタリアで急激に拡大しているコロナ感染に対応するため、11月3日の首相令では、イタリア全土に対する新たな感染防止措置が規定されました。

22 時以降翌朝5時までは夜間の移動制限。土曜日、日曜日、祝日、そして祝日の前日には、ショッピングモール内及び市場内の商店は、薬局、ドラッグストア、衛生用品販売店、食料品取扱店、タバコ屋及び新聞雑誌売店を除き閉鎖。美術館、文化施設等の市民への開放停止。なおすでに、その前の 10 月 24 日首相令では、飲食サービス業：営業は午前5時～18時まで。ジムやプールは営業停止、劇場、コンサート会場、映画館など（屋内外関わらず）市民に開かれた／観客が入る場所は閉鎖。などなどの規定も制定されています。

さらに、11月5日からはこの春のような「全国一律のロックダウン」ではなくて、感染状況や感染リスク、医療体制など21の指標をもとに、全国 20 州を3つのエリアに分けて、ゾーンごとに感染防止措置が規定されることになりました。3つのエリアは「レッド・ゾーン」「オレンジ・ゾーン」「イエロー・ゾーン」。交通信号のように、イエロー、オレンジ、レッドの順で感染防止措置も厳しくなるという仕組みです。この「ゾーン」分けは、11 月 4 日に発表されました。予想通り、ロンバルディア州は、ピエモンテ州、ヴァレダオスタ州、カラブリア州とともに「レッド・ゾーン」と「審判」が下りました。

我ら「レッド・ゾーン」では、基本的には外出禁止。州・市をまたぐ移動が禁止されるだけでなく、地域内での移動も禁止されます。証明される仕事上の理由、必要不可欠の買い物、又は健康上の理由に動機付けられる移動だけが許されます。なお、食料品や生活必需品・サービスを除くと、一般小売店舗はクローズ。とはいえ、春のロックダウン時とは異なり、まあ、前回の経験をいかしたのだと思いますが、文房具屋、携帯電話店、メガネ店、花屋、生菓子屋などの営業は許可されています。飲食サービス業の営業は禁止。持ち帰りサービスは 22 時まで。宅配サービスは制限なしに可能です。「美容・理容店」は営業可能となりました。誰もが、生活必需品であると認められたためかと思われます。近くの散歩は「正式公認」されました。人間の散歩も犬の散歩と同様の権利が認められたこととなります。

なお異なるのは、「学校」です。春のロックダウンでは学校はすべてクローズとなりましたが、今回は、幼児教育、小学校、中学 1 年生までは、通学を継続。ただし、中学 2 年生以上は、学校・教育活動はオンラインのみで実施となります。

ところで、今回の「3つのゾーン分け」は2週間後に「見直し」が行われ、その時点で「感染リスク」が下がっていれば、「レッド」から「オレンジ」へ移行する可能性もあるようです。もちろん、逆に「イエロー」から「オレンジ」へ規制が強化してしまう州もあることとなります。今回の措置は準備日 1 日をおいて、結局 11 月 6 日から有効となります。「ああ、またか」と溜息をつきたくになります。ただ、正直なところ、前回の経験で「少し慣れている」という部分もあります。ともかく、この厳しい措置が効果を発揮して、ロンバルディア州も2週間後には「レッド」から「オレンジ」へと、カラー・チェンジしてほしいものです。（11 月 5 日）

## 5. 日本への一時帰国

### ●一時帰国を決める

例年であれば、夏と冬に日本に一時帰国していましたが、コロナ禍で、いつ帰国できるか先の見えない期間がずっと続いていました。日本入国時空港でコロナ検査があり陰性であっても2週間の自己隔離が義務付けられていること、空港から隔離場所までもタクシーを含む公共交通機関の使用も禁じられていることなど、帰国の際のハードルは高く、当初は、帰国はコロナ状況が落ち着いたらと考えていました。しかし次第に、「完全に収束する」見込みは当分ないことに気づきました。それなら、日本での事務的手続きなど諸々の案件もあるので、このままあてもなく延ばすよりは、年内に一時帰国し、片づけることに決めました。

9月末には一応ルフトハンザのフランクフルト経由羽田便(ANA 共同運航便)を予約しましたが、10 月にヨーロッパ各国でのコロナ第二波感染が悪化するにつれて、予約便は4回もキャンセル・変更となり、予定通り飛行機が飛ぶのか、空港での検疫はどうなるのか、出発まで不安な気持ちでした。

### ●ミラノ・リナーテ空港で

11 月 21 日(土曜)朝 4 時起床。簡単な朝食をすませ、荷物と戸締まりを確認して、5 時過ぎに電話でタクシーを呼びました。この時期、イタリア全土で、夜 22 時から朝 5 時までは「外出禁止」。さらにロンバルディア州は「レッド・ゾーン」なので、不要不急

の外出は許可されていません。道中なんとかいわれると困るので「自己申告書」に「リナーテ空港から出発」と記載して持参しました。

タクシーはすぐ来てくれて、リナーテ空港に到着。「国際線のルフトなの」というと、「お客さん、今は入り口は一つだけです」といわれて、納得。その通り。入り口を入ると、予想外に、結構の人混み。狭いところだけを使っているためです。

出発を国内、ルフト、「その他の国際」にわけて、チェックインの行列ができていることがまずわかりました。ルフトの列は10数名程度。カウンターは5つくらい開いているものの、左のカウンター二つがネックになっていました。一つは、犬二匹を運ぼうというカップル。これまで猫や小型犬をケースに入れて1匹運ぶところはみたことがあります。今回は、大きなケースをそばでみると中型犬。それが2匹。事前にちゃんと手続きをしていたのか、よくわかりませんが取り扱いにもめているようでした。その隣は、これも、途方もなく大きな荷物を五個、預けようとしている二人組。ここまでくると旅行というより引越かし？と思いたくなるほど。どちらも、フランクからは「カンクン」に乗り換えると言っていました。「カンクン？」それってどこなのと思いました。

この二組、その後、どうなったのかわかりませんが、私の番がきて、荷物を二つ預けました。今回は、羽田空港での検疫など先が見えないので荷物を少なくことを心がけ、着の身着のままという感じの荷物でした。チョコレートやパネトーネなどのお土産類はゼロ。このご時世、今年は会食も集まりもなさそうなので、お出かけ着もゼロ。通常機内持ち込みに使っているトローリー1つに必需品をいれて、セーターなど着替え類をボストンバックにいれて、預けました。

私はすでに記入済みの「自己申告書」を持参しましたが、用意が無い人は空港で用紙をもらって記入していました。さらに、ルフトのカウンターで別の用紙も配布されました。「コロナに感染していないことや、隔離期間中ではないこと」の自己申告書でこれもすぐに記入して署名しました。

さて、次は、ゲートになります。なぜか、その列がえらく長くて蛇のようにクニャクニャしてわがわがわかりません。「ゲートにいくのはここなの？」と周りの人にきくと、

「そうなんだ」との声。しょうがないのでただ並びました。しばらくすると、「フランクフルトの人は前の方にいいんだって」という声を耳にしたので、もしかしたら、私も？と思って、その声のする方にむかっていって、係員にきくと「フランクね、この脇で待って」とのこと。10人くらいがそこに固まっていた。あのまま待っていなくてああよかった、と思いました。「イタリアはいつもこれなんだから」と思いました。アナウンスなどは一切なしで、聞き耳を立てていないと、取り残されてしまうのです。さて、そこで待っていると、やっと「フランクフルト行の人、前にいいですよ」とのこと。

なんでこれほど待たせるのかと思ったら、「地方警察」警官が3名、自己申告書チェックを行っているのです。用紙を渡し、「身分証明書」を見せると照らし合わせてチェックをしていました。長い列などまったく気にせず何とも丁寧というかノロイというか、、、。これが終わって次は手荷物チェック。ああ、ここでまたパソコンからiPadからスマホから全部カバンから出して、化粧バックも出して、いくつものトレイに入れるのかと思ってウンザリしました。ところが、なんと、「最新式」の手荷物チェックシステムで、何も出さないでカバンにいれたままでよいことに驚きました。

そういえばリナーテ空港は1-2年前から、日本など長距離便も可能にする滑走路を新設し、荷物検査からハンドリングシステムまでヨーロッパ有数の最先端システムを導入するという「新リナーテ計画」の工事を始めていました。本来なら、すでに「新リナーテ空港」が華々しくオープンしていたはずでした。「リナーテ—羽田直行便」も今年4月から開通の予定でした。それが、こんなことになったため、せつかくの大設備もお蔵入りですが、荷物チェックだけは最新式の2ラインが使われているということのようでした。

ともかく、荷物チェックの超スピードアップで挽回して、ゲートに向かいました。もうゲートが先に見えたころ、「フランクフルト便は早く搭乗するように」とのアナウンス。あわてて搭乗口に向かいました。カフェはやっていましたが、恒例の最後のエスプレッソを飲む時間もありませんでした。

さて、機内に入って、自分の席に座り、周りを見回して驚きました。満席なのです。ド

イツに戻るドイツ人らしい人。フランクフルトから世界各地へ乗り換えるイタリア人や私のような外国人。小型機でしたが少なくとも 120-130 名は乗っていました。フランクフルトで乗り換えて世界各地へ飛ぶ接続便に間に合うよう、日中の便は欠便としてこの早朝便一本に集約させたようです。

### ●隣席はマルケ州から NY への男性

私の隣には 40 歳くらいの感じのいい男性。この人の身の上話を聞いて、驚きました。イタリア中部マルケ州に住むこの男性、最終目的地はニューヨーク。ところが、今春、トランプ大統領が米国を「コロナ渦から守るために」、シェンゲン協定内からの外国人の米国入国を禁止したため、イタリアからは米国に直接入れなくなり、イタリア政府も反復措置としてイタリアー米国の直行便を中止しました。そのため、このマルケ男性、昨晚、マルケから 450 キロをレンタカーで走ってリナーテに到着し、空港で夜明かし。朝 7 時発のフランクフルト行き便に乗るにはそれしかなかったとのこと。道中で、自己申告書の検閲を何度も受けたと言っていました。

さて、フランクフルトからは「カンクン」へ。この人も「カンクン」なのです。「あの、カンクンでどこでしょうか？」ときくと、「メキシコです」とのこと。カンクンは海沿いのリゾート地で「ここで 2 週間、ホテルで過ごして、そこから NY へ飛ぶんです。今、米国に行くにはこれが定石になっています」とのこと。「それは、それは」というしかない。「なんでまた、NY へ？ あそこもロックダウン状態のようですが、、」というと、「実は昨年 12 月に私の勤務先の会社が、NY に支社を開設し米国進出をしたのです」「大変なタイミングでしたね」と私。「そうなんです。毎月、オフィス賃貸料がとられていて。就業ビザもとれないし。一応 3 ヶ月は滞在できるのですが」とのこと。

「ところで、なぜ、マルケからリナーテまでいらしたのですか。ローマから発てばいいのでは？」という、「それが、予約していたローマーフランクフルト便が欠便になったんです。フランクからカンクンに乗り継ぐには、このミラノ便しかなくて」とのこと。なるほど、なるほど。私だって、今回、最初予約していた接続のいい便を 4 回もキャンセルされ・変更されているので、その事情はよくわかりました。マルケ男性「NY へは、当初は、ローマー NY 直行便を使ってとても楽だったんです。予定がまったく狂ってしまって」 ああ、そんな時代もあったのでした、、、、。

そんな会話を交わしていると、客室乗務員が用紙を乗客に配布しました。「追跡調査」のために名前、携帯電話、メールアドレスなど記入し、署名しました。フランクフルトへ到着。

### ●フランクフルトから羽田へ

空港のショップ類は 99%閉まっていますが、DUTY FREE とカフェやベーカリー類は開店。私は 5 時間も待ち時間があるのでのんびりと「乗換」ゲートを探して、ただただ歩きました。ほとんど人通りのない長い通路もあり、ゆっくり歩いて、出発ゲートに到着。足を上げられる楽なチェアがあったのでそこに陣をとりました。まだ 4 時間はあり、東京行きはまだ表示もないのでのんびり待つしかありません。居心地がよくてつい眠気が襲ってきましたが寝てはダメ。1 時間半位前になってやっと ANA のカウンターがあきました。ちゃんと出るのだとほっとしました。

さて搭乗。私の座席は最終列の真ん中 3 席の通路側。一列は 3, 3, 3 の 9 席ですが、各列に一人かせいぜい二人が着席。これならソーシャル・ディスタンスは何の心配もありません。前後も左右も誰もいないのだから。

ANA のスチュワーデスの優しさ、健気さには胸が熱くなりました。明るくてきびきびしていて、頼りになる感じ。こんな時だから、それがすごく嬉しく感じました。ああ、ここからは日本モードで、おまかせで大丈夫と思いました。スナックと飲み物もってきてくれたので赤ワインをもらいました。ああ、後は到着を待つだけ。食事もいつもより一品多い感じで美味しくいただきました。それから音楽を少し聞いた後、3 席使えるので横になって熟睡。結局到着 3 時間くらい前まで寝てしまいました。朝 4 時起きでその前も緊張していたのでほっとしたのでしょう。さて、乗務員が二種類の記入用紙と何枚もの説明資料をもってきました。

説明資料は羽田空港到着後の検疫手順の説明で、手順のフローチャートが示されていて、細かい注意事項が沢山書いてありました。全体像を示して理解してもらって、後は自己責任でステップごと進んでいく、日本式のインストラクションです。また、入国後の行動制限や 14 日間にわたって毎日健康チェックがあり、LINE で応答もできるので LINE アプリを使用してほしいという要請もありました。

一方、記入用紙の一つは「質問票」というもので、過去14日間の滞在地、パスポートのデータ、日本での連絡先、過去14日間の健康状態、到着後14日間の滞在先などを記入しました。LINEでの健康確認への同意の有無も示すことになっていました。もう一つは、「入国される方へ検疫所よりのお知らせ」という用紙、入国後の健康フォローアップを説明したもので、滞在期間と待機場所を本人が記入する用紙でした。「全員が用紙2枚の記入を終えていただかないと、降車できません」とアナウンス。機内には資料を読み、記入する人々の少し緊張した雰囲気が漂いました。

### ●羽田空港での検疫

いよいよ定刻通り朝9時前羽田空港に到着。降車後、降りた人全員が一緒に検査会場に向かうという。降りてこれからいよいよ検査と緊張していると、私の名前を書いた表示板を持った職員が待っていました。「あの、何か私に?」「すみません、お客様のお荷物が積み残しで届いていないんです」「え?? 二つ預けたのですが、どちらですか。いつ届くんですか。自己待機に必要なものを選んでいれているのに、、、」「検査が終わった頃、どのお荷物が届かなかったのかいつ届くのか確認できていると思います」とのこと。

こんな話をしている間に、一緒に到着した皆はずっと先の方にいつまでもいってしまっているのであわてて追いかけてきました。いくつかの部屋を順繰りにかなりの距離を歩くこととなります。第1ステップは用紙を見せて書類内容を確認してもらった「ガイダンス」部屋。記載漏れなど細かく見ていました。さらに歩くと、第2ステップの検体採取会場へ。唾液を自分で採取するルートと容器を渡され、選挙投票所のように区切られた採取ブースで各自、唾液をルートで入れる。3-4分で完了。思ったより簡単でした。第3ステップとして再度、書類審査があり、そのあと、第4ステップの「検査結果待合スペース」に向かいました。なお、検体採取が終わったところで、ハイヤーをネットで予約した時に指示されていた通りに、予約していた厚生省お墨付き「感染予防ハイヤー会社」に確認電話をいれました。こちらも問題なし。

「検査結果待合スペース」は広大な部屋。大勢入ってもソーシャル・ディスタンスがとれる広さ。用紙を渡して、待合室で待ち、掲示ボードに自分の番号がでたら、結果

受け取り窓口に行くと、結果シールを張ってくれる仕組み。近くで、若いママが可愛い赤ちゃんをあやしていました。「赤ちゃん何ヶ月ですか」ときくと、フランクフルト在住の方で「8ヶ月です。コロナが始まった時に生まれたのでずっと家にこもっていました」。関西から実家のご両親が車で羽田まで迎えにきているとのこと。大変な里帰りになったものです。

15分位待つと、結果が陰性と出ました。すべてのステップを終了し結果を得るまでに正味1時間もかかりませんでした。いくつかの会場間を黙々とかなり歩くことになりました。

さて次は入国検査へ。係員がやってきて、私のトrolleyがフランクフルト空港に積み残されていて、24日に到着という連絡を受けました。しょうがありません。この程度ですめばよしというしかないのでしょうか。

感染対応ハイヤー予約は11時。届いた方のカバンを受け取って、今度は運転手に直接電話して確認。一休みして定刻に待ち合わせ場所に行くと、黒塗りハイヤーが待っていました。カードで支払いもできて、安心して都内の自己待機の場所へ。荷物積み残しのハプニングはあったものの、羽田上陸後の検疫やハイヤーは、すべてスムーズに運び、気が抜けるほどでした。ともかく、これで「一時帰国」の旅は終了しました。あとは2週間の自己待機の日々を経て自由の身へ。(11月22日)

.....  
2020年2月21日に、イタリアで新型コロナ感染第1号が発生してから11月中旬までのコロナ禍のミラノの日々の出来事を綴ってみました。

予想もできなかった「大波」「小波」の中で、不安や悲しみに襲われることもありましたが、あれこれ詮索することは諦め、元気に一日が終わればそれでよし、と思って日々を重ねてきました。

ところでイタリアで30年生活していますが、今回ほど、イタリア人の生真面目さ、寛容さ、助け合いの精神を感じたことはありません。あの厳しかった春のロックダウン、イタリア中の人々が気持ちを一つにして、政府の感染予防措置に涙ぐましいほど素直に従ったのは事実です。社会全体にコロナに立ち向かう強い連帯感があったので私も支えられてこの難しい時期を乗り越えることができたようにも思えます。

他国で見られた、「コロナ否定論」や「マスクの是非」の不用な議論もあまりなく、「マスクで感染が防げるなら」と大多数の人々が粛々とマスクを着用。見方を変えれば、それだけ「コロナ大感染」のショックが大きく、自分や家族、大切な人々を感染から守れるのであれば、それに役立つことを何でもしようという「納得」の上での行動といえましょう。

現在、イタリアもヨーロッパ各国と同様、コロナ第二波の猛威に襲われています。恒例の12月7日のスカラ座「プリマ」も、史上はじめてオペラ公演は中止となり、無観客の「オペラアリアのコンサート」と変更となりました。観客席スペースを座席を取り払ってフルオーケストラが陣取り、舞台上でオペラ歌手やバレリーナが熱演する思い切った演出で世界中に発信されました。そして、ミラノの友人たちは静かなクリスマスを過ごしたようです。

コロナ禍の生活はまだまだ続きそうです。手ごわい相手なので先はみえませんが、これ以上悪化することなく、落ち着いてくれることを願うばかりです。

大島悦子